

聖書:ルカの福音書23章32~49節

説教:父よ、彼らをお赦し下さい

はじめに

祭司長たちがイエスの弟子のユダに銀貨三十枚を与えてイエスの居場所を聞き出して、ただちにゲッセマネの園の園に向かうと、イエスは何の抵抗もせずあっけなく逮捕されてしまう。多くの弟子たちが逃げ出したなか、一人だけ踏ん張って残っていたペテロも「あなたもイエスの仲間だ」と言われると急に恐ろしくなり、イエスを三度否定して大泣きしてしまいます。弟子たちが逃げ去り、たったひとりになられたイエスはローマ帝国の総督ピラトのところで裁判を受けることになる。ピラトは最初イエスをむちで打ってから釈放するつもりだったのですが、興奮した群衆は一斉に「その男を殺せ」「十字架につけろ」と叫び続ける。これを見たピラトは暴動になることを恐れ、ころっと意見を翻してイエスは死罪だと宣告し、どくろと呼ばれる場所でほかの二人の犯罪人とともに十字架にかけることにします。その十字架の周りにはどんな人たちがいて、イエスはなにをしたのか。ともに見てまいります。

1 群衆

1) 嘘と偽り

ピラトも驚くほど群衆が「十字架につけろ」と興奮して叫んだのには、二つの要因が考えられます。一つ目。イエスがローマ帝国からイスラエルを解放してくれる救い主になるのではないか。人々の期待はどんどん高まり、イエスがエルサレムに入られる時には大歓声を挙げて人々は迎えた。いまなら大スター扱いです。ところが人気絶頂の大スターが神を冒瀆した罪によってあっけなく逮捕されてしまい、人々の目にはいかにも弱くてみすぼらしく惨めな姿にしか見えない。こんな男に望みをかけていたのかと思ったら何か裏切られた気がして、急に怒りが湧いてきた。そういう思いがあったのでしょう。

二つ目の要因は、祭司長たちの動きです。彼らが群衆をたきつけている。今のことばで言えばプロパガンダという手法を使って民衆を誘導し、「イエスを十字架につけろ」と叫ばせていく。具体的にはどうするか。デマや嘘を何度も繰り返す。それを大声で叫び続ける。そうすると最初は耳を貸さなかった人たちも、聞いているうちにだんだん「本当かもしれない」と思うようになっていく。昔は

映画やラジオを使い、今はテレビやネットを駆使して、同じことをしています。こうやって人々が真理ではなく偽りを選んだことで、イエスは十字架に追いやられていった。私たちがもし真理をみきわめる目を失ったなら、神の子さえ殺していく。そういうことを教えています。

2) 自分を救ってみろ

十字架の周りには様々な人たちがいます。けれども叫んでいることばはほとんど似ている。35節で議員たちはこう言った。「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」36節で兵士たちがこう言う。「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」犯罪人の一人はこうです。39節。「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え。」自分を自分で救ってみろ。そうしたら信じてやるから。そう言いたい。では、イエスは自分を救ったのか、救わなかったのか、そのことはまた後で考えたいと思います。

3) 彼らをお赦し下さい

そのまえに、イエスが十字架でどのようなことを語ってくださったのかを見ます。まず34節。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」「彼ら」とはだれのことか。直接には、イエスを十字架につけたローマ兵、あしもとで衣を取り合って騒いでいるローマ兵のことを指しているのは明らかです。上司からの命令で動いているだけですから、十字架の上におられる方がどなたであるのか、また自分のしていることがどんな意味なのか考えることはありません。兵士という立場上、ただロボットのように動かなければならない。だから「自分が何をしているのかが分かっていない」というのは事実です。

では「彼ら」はローマ兵だけなのか。たとえば十字架の周りに集まっている民衆たちはどうでしょうか。彼らは昨日までイエスを熱心に支持し、イエスは自分たちの希望だとまで思っていた。その人たちが、「自分を救ってみろ」と叫んで蔑む。いったいだれに向かって言っているのか。人々は確かに知りません。十字架の上におられるのは、実は神のひとり子である。霊の目が閉じら

れていて、真実が見えていません。イエスは、ご自分のからだの痛みと苦しみのことよりも、そんな人々の救いのために祈っておられました。

2 二人の人物

1) 犯罪人の一人

十字架の周りにいたほとんどの人たちがイエスを嘲って叫んでいましたが、それとは対照的な人たちが二人いました。一人目は、十字架にかけられていた二人の犯罪人のうちの一人です。もう一人は百人隊長。この二人を見ていきましょう。

まず犯罪人の方から。彼はもう一人の仲間をたしなめてからこう言います。「おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」
「イエスさま。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

この男は、いままで何度も強盗を働き、人を何人もあやめて逃げ回り、人々からは大悪党と呼ばれて恐れられていた。そんな男だったと思うのです。ところがいま十字架にかけられて死ぬというときに、隣にイエスと呼ばれる男がいることに気がついた。おそらくイエスの名前は聞いていたでしょう。でも自分とは関係ないと思っていた。ところが、いままでどっぴりと罪の世界につかっているいろいろな人を見てきて、こんな男には今まであったことがないと驚く。この方には罪がないとわかるのです。それなのにどうして十字架で処刑されるのか。普通ならこんな場合、自分は無実だと大暴れするはずなのに、この方には不思議な平安が満ちていて、だれをも恨むことなく、ただご自分のいまの状態に満足しているのです。どんな悪事をはたいても動じないような男が、イエスに出会って深いところから心を動かされ、自分の口で自分は罪人なのだと告白してからこう言うのです。「イエスさま。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」この言い方がすばらしい。
「御国に入れて下さい」とはとても言える身分ではないと知っています。そこで「思い出してください」と実に控えめにお願ひする。

これに対するイエスの答え。43節。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

十字架がパラダイス？ブラック・ジョークを言ったのか。そうではない。日本語で読むと、「わたしとともにパラダイスにいます」は、「今すでにパラダイスにいる」というふうにも聞こえてしまう。実はそうではなく、これから間もなくあなたはパ

ラダイスに迎えられていく。それは神の意志として決まっている。少し先のこととして言っていた。訳が悪いわけではありません。日本語には未来を現す表現がないので、どうしてもこういうふうになってしまうのだそうです。

2) 百人隊長

イエスの十字架の周りにいて、イエスから心を刺された二人目の人物は百人隊長です。彼はローマ帝国の軍人ですから聖書のことには知らないし、ここにいたのもたまたま命令で十字架刑の担当になったからです。ところがその百人隊長が、平安に満ちている十字架のイエスを見て心を動かされ、こう告白する。47節。「百人隊長はこの出来事を見て、神をほめたたえ、「本当にこの方は正しい人であった」と言った。」

百人隊長の場合は、犯罪人の場合と違ってイエスから直接声をかけられたわけではありません。ただ十字架の下で見ただけ。それでもイエスの十字架は人のところに迫ってきました。どんなふうに迫ってきたか。「本当にこの方は正しい人であった。」言い換えれば、自分には正しさが無いという告白です。十字架で輝く神の栄光の光が自分の罪をあぶりだしているかのようです。もしかして十字架にかかるべきなのは、自分ではないのか。世間を騒がせた大泥棒であろうが、イスラエル人ではないローマ帝国の軍人という異邦人であろうが、イエスの内側から輝き出る真理の光と救いの恵みは等しく注がれていきます。

3 神の子キリスト

1) 自分を救わない

人が救われるためには、聖書を勉強してとか、あれをしてからこれをしてからと、いろいろなことを思いがちです。ところがおわかりのとおり、人の救いにはそんなことはまったく関係ない。では何が必要なのか。いま見てきた二人のことに共通しているのは、自分は罪人であるとの自覚です。一方は犯罪人、一方は百人隊長。まったく正反対の道を歩いてきたこの二人なのに、イエスに出会って同じ所へ導かれます。心の奥底に隠していた罪を告白していった。いったいなにがあったのでしょうか。特別に彼らがなにかをしたということはないようです。そうすると、イエスが何かをしているということになる。では、なにをしたのか。イエスは確かに祈りました。「彼らをお赦し下さい。」その他にはなにかしたか。なにもしません。人々は何と叫んでいましたか。「もし神のキリストで、選ば

れた者なら、自分を救ったらよい。」ところがこの方は、自分を救おうとしなかった。それも、煮えくりかえるような怒りを抑えながら我慢していました、というのではない。ご自分の状態に満足されている。痛みに苦しみ、呼吸は荒く、汗と血が流れているのに、喜びに満ちた輝きが顔に見えるのです。

2) 罪人を赦すために

この方は、人を罪から救うために来られたと言われます。いったいどうやって私たちに救うのか。大きな奇跡を起こしてですか。確かにイエスは病を癒やし、悪霊を追い出し、死んだ者をもよみがえらせました。しかし、本質はそこにはない。極端な言い方をすれば、この方は十字架でなにもされない、ただ人々の憎しみ、さげすみ、嘲りを受けながら死ぬ、ひとことで言えば自分のためには何もしない。そうやって私たちに救おうとした。この世では、何もしないということは敗北です。イエスは敗北したのだと思い込んだ人たちは、胸をたたきながら帰ります。

でも本当に敗北だったのか。十字架の周りにいた人たちの中から、ふたりが救われました。たったふたりと言いますか。ここだけ見れば確かにそうです。でも福音はここから始まって全世界に宣べ伝えられていき、いま私たちのところにも届けられました。イエスの十字架の祈り。「父よ。彼らをお赦し下さい。」この祈りがあるから、私たちは安心して自分の罪を告白して赦しをいただくことができるのです。

二千年前の十字架は、今私たちの前に立っていて、ここに来なさい。そしてイエスの御顔を仰ぎ見て罪を悔い改めなさいと、語ってくださいます。